大阪方言「ネン」

山本俊治

一

大阪方言の特徴的な事象の一つに、「ネン」があげられよう。その使用層、その待遇度はきわめてはばひろい。

○ワシ　ソナイ　オモウ　ネン。（老・女→二十女　私はそう思うんだよ。）

は女性老年層のふつうの言いかたである。

○コノ　シナワ　ジョートーデ　オマン　ネン。（五十七男→客　この品は上等なんです。）

は男性初老層のていねいな言いかただし、

○イッペン　ミニ　イテキタラ　ドナイヤ、ネン。（五十男同士

いちど見に行ってきたらどうなんだい。）

は同じ階層のぞんざいな言いかたである。

○キョウワ　ゴジカンヤ　ネン。（女学生同士　今日（の授業）は五時間なのよ。）

は若は女性のふつうの言いかたである。

○ボクカテ　イク　ネン　ヤ。（小学男→家人　僕も行くんだよ。）

は児童のふつうの言いかたである。

○ナニ　シテヤガン　ネン。アホタレ！（若い男・エラーをした野球選手へのヤジ　何をしてやがるんだ。ばかたれ！）

は若い男の口ぎたない罵詈である。

このような大阪方言一般のもの言いにはもちろん、おしなべて共通語的な言いかたに意識的な女子学生のもの言いにも、しょっちゅうあらわれる。

○センセ　オミエニ　ナン　ネン　ヨ。（先生がお見えになるのよ。）

このように「ネン」は大阪方言の世界に、きわめてひろく、ふかい定着性を示している。

以下「ネン」の表現性について、分析しかんがえてみる。

二

○ワシ　ソナイ　オモウ　ネン。（前出）

○キューコーガ　トーッテシマウマデ　マチマス　ネン。（老婆→孫）（普通電車は）急行電車が通過してしまうまで待つのですよ。）

○エライ　ハヤイ　ネン。（中学男同士　（あいつの逃げ足は）たいへん速いんだよ。）

○ワタシ　イヤヤ　ネーン。（女子大生同士　私（そんなのは）いやなのよ。）

これらの「ネン」は、「～思う」・「～待ちます」・「～速い」・「～嫌や」というのに添加して、「～思うのだ」・「～待ちますのです」・「～速いのだ」・「～嫌なのだ」という措定の語気をつよくうち出している。（もちろん、最後の例は、「～イヤヤ」の「ヤ」語尾の表現性をもあわせてかんがえなければならないだろう。）それは、ほとんど措定語「ヤ」の表現効果とかわらない。「ワシ　ソナイ　オモウ　ネン」は、「ワシ　ソナイ　オモウンヤ」と実質的には大差ない。

「ネン」の出自については、「ノ　ヤ」がかんがえられる。その出自からくる「ヤ」の措定性が、もとの形はわすれられても、この語に内包されていることはうなずける。一方出自にみられる「ノ」の機能は、ふつう、措定語「ヤ」は用言に直接できないのに対して、「ネン」は直接しうるというところに、そのおもかげをとどめているといえよう。

すると、このように「用言＋ネン」における「ネン」は、機能的には、まだ文末詞として完全に熟する以前の、出自のおもかげをとどめている段階にあるといえよう。

三

つぎに、措定語を下接した場合の「ネン」についてかんがえる。

○ボクカテ　イク　ネン　ヤ。（前出）

○コレガ　エー　ネン　ヤ。（中学男同士　これがよいのだよ。）
○イマデモ　ユートリマン　ネン　ヤ。（五十男→客　いまでもうわさをしているんですよ。）

これらの「ネン」には、前項の措定性をつよくうち出したのとは、またちがった機能が感じられる。

これら措定表現にみられる措定語「ヤ」は、体言または体言相当格につづいてもちいられるのがふつうである。とすると「ヤ」助動詞をとっている用言「行く」・「良え」・「言うとります（ん）」に体言格を与えているのは、それらに下接している「ネン」だということになる。すなわち、この場合の「ネン」は準体助詞「ノ」相当の機能にもちいられているといえよう。じじつ、「ボクカテ　イク　ネン　ヤ。」を、「ボクカテ　イク　ノ（ン）　ヤ。」におきかえてみても、たいしたちがいはない。これらは、語源的に内包されている「ヤ」の措定性はわすれられ、もっぱら「ノ」の機能に中心をおいた言いかただということになろう。このように「ノ」相当に用いられているということは、「ネン」が、短呼されて「ネ」となるところにもうかがえる。

○ソンナケ　コレワ　エー　ネ　ヤ。（兄→弟　それだけこれはよいのだよ。）

このように、「ヤ」に上接した言いかたに関連して、文末詞「ド」・「デ」、「モン」・「トコト」、「ソー」、「シ」に上接した言いかたが注意される。

○ハヨ　ベベ　キン　ネン　ド。（若い父→幼児　（起きたら）すぐに着物をきるんだゾ。）
○キット　ネテヨン　ネン　デ。（五十男同士　きっと寝ているよるんだよ。）
○ナンニモ　クレヘン　ネン　モン。（小学男→母親　なにもくれないんだモノ。）
○コレワ　オイトク　ネン　トコト。（老女→お菓子をせがんでいる幼児　このお菓子はしまっておくんだよ。）
○ヤー、　コンナ　ワルサ　シテン　ネン　ソー。（五十女・幼児のいたずらをみて　やあこんないたずらをしているんだよソレ。）
○ソレニ　コンナ　コト　ユー　ネン　シ。（五十女同士　それにこんなこと（わるロ）をいうのよ。）

などのように。

「ド」・「デ」は、男ことば（「ド」）女ことば（「デ」）、品位の程度（「デ」は「ド」より上）にちがいはあっても、いずれも、自己の見聞・意思をつよく主張する言いかたにつかわれる。「デー」・「ドー」としり上り調子に言えば、相手につよくよびかけ、同意を求める言いかたになるし、「デ」・「ド」とつよく降り調子に言えば、一方的に自己の見聞・意思をつたえる言いかたになる。

「モン」・「トコト」は主として五十代以上の女性につかわれる、名詞系の文末詞であるが、「ド」・「デ」よりは、いっそう自己中心的な主張になる。

「ソー」は代名詞系文末詞であるが、やはり出自からくる、それと指示して注意をうながす語気に応じて、自己の見聞判断を主張する。

「シ」は若い世代にはほとんどきかれない中年以上の女子ことば

である。「モシ」系の文末詞である。相手によびかけ、自己の主張に賛同を求める言いかたである。

これら「ド」・「デ」、「モン」・「トコト」、「ソー」、「シ」の語気が強調されると、これらに措定の語気が生じてくる。たとえば、

○ソヤケド　アノ　ヒトワ　クワシイ　コト　シッタハッ　ド。（青年男同士　だけど、あの人はくわしいことをしっていなさるゾ。）

○センセ　ドッカイ　イカハッタ　デ。（女学生同士　先生はどこかへいらしゃったよ。）

なども、「ド」・「デ」の強調のしかたによっては、「〜知っていなさるのだ」・「〜いらっしゃったのだ」という言いかたにもなってくる。こうなれば、もはや実質的には措定表現ということになろう。他の語についても同様である。

このように、これらが措定性をつよく帯びてもちいられた場合、それらに上接する「ネン」にも、前述「〜ネン　ヤ」にみられたような機能が生じてくる。

以上のように、措定語に上接する「ネン」は、その内包する「ノ」の機能に中心をおいた言いかただということは、また、つぎのことからも推察できる。「〜ネン　ヤ」という形がある以上、ていねいな言いかたの、「〜ネン　ダス」・「〜ネン　デス」もあって然るべきだと思われるが、実際にはそんな言いかたはない。そして、それらに相当する言いかたとしては、

○モー　トーカラ　ヨー　ゾンジテ　オリマン　ノン　デス。（老婆→客　（そのことは）もう前からよく存じておりますので

○イヌ　ン　ダス。（老男→客　かえるのです。）

などいう。すると、「〜ネン　ヤ」の「ネン」は、ていねいな言いかたをした場合の、「ノン」・「ン」に対応するといえる。だいたい、「ヤ」が体言、または体言相当格に接続し、「ド」・「デ」・「モン」・「トコト」・「ソー」・「シ」が用言の連体形につづくというところからも、この場合の「ネン」が、「ノン」・「ン」相当のものだということはうなずけよう。といっても、「行く　ン　ヤ」・「行く　ノン　ヤ」にくらべて、「行く　ネン　ヤ」によりつよい措定性が感じられるのは、そこにやはり出自がものがたられているし、またその故にこそ、ていねいな言いかたには、「〜ネン　デス」・「〜ネン　ダス」などのようにはつかわれないのであろう。

四

つぎには、前項とは逆に「ネン」が措定語に下接している場合についてかんがえる。

○キョーワ　ゴジカンヤ　ネン。（前出）

○ヒー　イッパイ　ハタラク　トコダン　ネン。（四十男→客（この地方は）早朝から晩まで一日中働くところですよ。）

○ニセンアマリデン　ネン。（五十男→客　（人口は）二千人あまりですよ。）

○モー　ニネンメデス　ネン。（三十女同士　もう二年目ですのよ。）

これら措定語に下接している「ネン」には、それがひとまとまりのものとしてもちいられているうちに、その出自はわすれられ、内包

されている指定の語気が、念をおし、つよめる気持にかえられて、はっきり文末詞として熟成していることがうかがえる。

念をおし、つよめる文末詞には、外むきの、相手によびかけて同意を求めつつ強調する「ナ」・「ノ」と、内むきに、自己の判断情意中心に強調する「ワ」の二方向と、その中間に位する「ド」・「デ」、「モン」・「トコト」、「ソー」、「シ」などがあげられる。（もちろん、中間的なものの中でも、「シ」・「ソー」などは「ナ」的な方に近く、「モン」・「トコト」などは「ワ」的な方へかたより、「ド」・「デ」はさらにその中間的なものだといえる。）

これらとくらべた場合、「ネン」は、中間に位しながらも、いくぶん、「ナ」的な方にちかいと言える。やはり内包されている「ノ」の効果によるものか。

つぎに文末詞「ネン」の待遇度について言えば、そのはばはきわめてひろい。「〜ヤ　ネン」というぞんざいな言いかたから、「〜ダス（ン）ネン」・「〜デス（ン）ネン」というていねいな言いかた、さらには「〜デオマス（ン）ネン」・「〜デゴザイマス（ン）ネン」というきわめてていねいな言いかたにまで、はばひろくもちいられる。この点は文末詞「ナ」の待遇度のひろさに匹敵する。

（武庫川女子大学助教授）